あとがき

恩人追想　井上浩先生

ベーリ・ドゥエル
（川越いも友の会会長、サツマイモまんが資料館館長、東京国際大学名誉教授）

井上浩先生とは一九八一年が初対面でした。

きっかけは修士論文の準備の頃で、テーマは「日本へさつまいもはどのように伝来され、普及されたか」でした。資料については、世間的にサツマイモのイメージが強い川越についての資料も探しました。川越市立図書館でやっとひとつ見つかりました。井上先生著の「川越いもの作り初め」（『埼玉史談』第十八巻第四号一九七一）という論文です。

今では考えられませんが、当時の図書館ではすぐ先生の住所・電話番号を教えて下さいました。連絡したら、「すぐおいでよ」と言われ、それからというもの、先生に会う度に詳しいノートが増えていきました。初対面当時のノートには、先生の話がこう記録してあります。

「川越地方の物産史を調べています。特に川越いもは有名だったので力を入れています。ただ川越いもの研究者は他にいなく、一人ぼっちでやっていました。その意味でもドゥエルさんに会えてとても嬉しいです」

その気持ちは相互的です。だから先生と一緒に物産調べもやりました。文献だけではなく

現場調査も重要だからです。愉快なのは移動手段も同じ自転車でした。まもなく先生はまだ二人しかいなかった集まりを「川越いも研究会」と名付けます。その後、いも仲間はいもづるを引っ張る様に少しずつ増え、翌年には十人程になりました。

一九八二年は川越市制施行六十周年記念の年でした。井上先生は「川越いもの歴史」展を設けましょうと提案しました。十人位になってきた会員の様々な観点から見た川越いもの歴史、栽培方法、文化、料理、文献などの資料により展示準備がドンドン進みました。蔵造り資料館で展示できる許可も得ました(市立博物館の開館は八年先)。

「川越市制六十周年記念特別展川越いもの歴史」は九月六日から十二月二十四日まで開き、主催は「川越市文化財保護協会」、後援は川越市教育委員会でした。展示に合わせて、川越いも研究会の編著になる『川越いもの歴史』(蔵造り資料館発行)という冊子も用意しました。

同年の秋、偶然にも福原公民館の山田英次主任が「さつまいもトータル学」の講座を開催されることになり、私たちは山田さんにスカウトされます。井上先生は「(川越いもの歴史)川越とさつまいもについて」の講師になり、私が「(甘藷の研究)世界のさつまいも事情について」の講師になりました。

「川越いもの歴史」展とそれに続く「さつまいもトータル学」講座も好評で、これらによって川越さつまいもの文化ルネサンスが本格的に始まったと言えるでしょう。まず、川越いも研究会の会員や「さつまいもトータル学」の受講生や講師のみなさんが、協力してファンクラブ「川越いも友の会」を立ち上げたのです。やがてこれが川越さつまいも文化活動の基盤になっていきます。会長は砂糖問屋の田中利明社長、事務局長は山田英次さんが担当し、イベント計画から実施まで活発な活動が展開されていきます。

井上先生は、この活動と並行して数多くのいも関係の研究論文、随筆、本などを書き、講演なども積極的に行ないました。一九九二年には県立松山高校教員を定年になり、既に、いも文化活動のパトロンになって頂いていた、いも懐石料理屋「いも膳」の敷地に設けられたサツマイモ資料館の館長になりました。

同資料館は、一九八九年に「いも膳」社長の神山正久さんのご協力の下、山田英次さんの計画で実現しました。初代館長は山田さんです。ここは、やがていも文化活動の拠点になり、一九八二年の「川越いもの歴史」展以来のいも資料館の夢を叶えることになります。山田さんの手書きパネルは大変巧みで、いも文化のさまざまな課題が分かりやすく展示され、実物も二十種類ほど展示されていました。

井上館長は率先して全国(また中国などへも)調査に出かけました。また、のちに「日本いも類研究会」の二代目会長にもなりました。井上先生はさつまいも文化史の日本の最高権威です。

私たちさつまいも仲間は、井上先生のさつまいも関係文化史資料をどのように残すのが良いのか、ご家族と相談しながら検討中です。

どうぞ安らかにお眠りください。